

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：12301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720229

研究課題名(和文) 大学講義をデータとした「わかりやすい」日本語の研究

研究課題名(英文) A Study of Plain Japanese Using Lectures at a University

研究代表者

依山 雄司 (TAWARAYAMA, Yuji)

群馬大学・国際教育・研究センター・講師

研究者番号：30466685

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円、(間接経費) 180,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、留学生と大学教員の円滑なコミュニケーションを目的として、講義データの分析などを行い、外国人にとっての「わかりやすい日本語」の特徴の一端を明らかにした。中国人留学生を対象とした調査の結果、「専門用語の説明」では「提題型」「質問型」、また、「一般語の語義説明」では「質問 要点 具体例」の構造が高評価を得た。一方で、インタビューやアンケートの記述から、中級日本語学習者の講義理解には、配布資料や教科書など、事前・事後に参照可能な視覚的リソースの役割が大きいことが判明した。ここから、講義では、視覚的なリソースの十分な提供が第一で、発話への工夫はそれを補完するものと位置付けるべきだと結論づけた。

研究成果の概要(英文)：This research revealed a part of the plain Japanese feature for foreigners through experiments and some lecture analyses; the experiments aimed at smoother communication between foreign students and teaching staff at the university. Experiments were conducted with Chinese foreign students as subjects, who rated topic types and question types higher for explaining the technical terms. They also rated question-point-example structures higher for explaining general words. By using an interview and a questionnaire, the role of visual resources, which could be referred to both before and after the lecture, is identified to be essential for the understanding of an intermediate Japanese learner during the lecture. Conclusions drawn from these experiments are that sufficient visual resources should be given priority, and the adjustment behavior towards utterances should be treated as supplementary.

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：大学講義 わかりやすい日本語 やさしい日本語 留学生

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、日本の大学の国際競争力の強化を目的として、優秀な留学生を呼び込むために、留学生受け入れ体制の整備と同時に、日本語による講義を受講せずとも、英語による講義の受講のみで学位が取得できるコースの充実が図られてきた。他方で、このようなコースは、日本の大学を学位を取るためだけに「通過」する留学生を生み出す恐れがあるという点が指摘されている。また、こういった学生が日本文化や日本社会に愛着を持つかどうかについても疑問が残る。また、受け入れ側の大学にとっても、英語によるコースを開設・維持するためにコストがかかる、全ての教員が英語で講義を行えるわけではないなど、クリアしなければならない課題は多い。

(2) 上記のような問題点を解決しつつ、多様な留学生を引き付け、受け入れ可能にする手段の1つに、「わかりやすい」日本語による専門講義の提供ということが考えられる。すなわち、日本語のレベルがまだ十分でない学生でも受講可能な程度に、担当教員が難しい表現をやさしい表現に言い換えて話したり、書いたりしながら専門分野の講義をすることである。

(3) 日本語教育は、この点で、各種の専門教育に貢献できる知見を持っていると言える。例えば、ある程度トレーニングを積んだ日本語教師であれば、学習者のレベルを短い時間で判断し、その学習者の日本語レベルに合わせて、語彙・文法、スピード・ポーズ、談話展開などを調整する技術を持っている。また、フォリナートークやティーチャートークといった非母語話者向けに簡略化された言語行動の研究も蓄積されてきている。

## 2. 研究の目的

(1) しかし、日本語教育の知見を「わかりやすい」日本語による専門講義に応用するには、まだ検討すべき点がある。そもそも、専門講義における「わかりやすい日本語」とは、どのような形のものなのかが議論されていない。加えて、専門講義で提供されるような複雑かつ抽象的な内容をどこまで「わかりやすい日本語」で説明可能なのか、専門教育の教員が「わかりやすい日本語」で講義が行えるのか、などについても検討が必要である。

(2) 本研究は、専門講義における「わかりやすい」日本語の実態を明らかにし、その上で、各種の専門教育の教員が「わかりやすい」日本語で講義が行えるのか、また、行えるとしたらどのような方法が適切かについて明らかにすることを目的とするものである。

## 3. 研究の方法

(1) まず、「わかりやすい日本語」が実際にどのように用いられているか観察するために、大学における留学生対象の講義(専門科目と日本語科目、それぞれ90分×2)のデータを収集し、それを文字化し整理することで研究の基礎データを構築する。比較のため、日本人学生対象の専門科目のデータ(90分×2)も同様の方法で収集し、データに加える。

(2) その後、これらのデータを語彙・文法・談話構造などの視点から、観察し比較対照する。また、本研究では、特に「専門用語の説明」「一般語の語義説明」などの「ことばをわかりやすく説明することば」に焦点を絞って、その使用実態、そして留学生にとっての「わかりやすさ」について分析・考察する。

## 4. 研究成果

(1) 専門教員による留学生対象の講義データと、日本語教員による講義データの比較を行った。その結果、後者のほうが、質問などのインターアクションを多用する傾向にあることが明らかになった。続いて、専門教員による留学生対象の講義データと一般学生対象の講義データの比較を行った。その結果、前者のほうが、発話の長さが短い傾向が観察された。しかし、この調査を通して、講義における日本語の「わかりやすさ」は、講義の内容や受講者の知識・人数に大きな影響を受けるため、単純比較が難しいことがわかった。この結果を踏まえ、各データで共通して観察された語彙の調整行動、すなわち「ことばをわかりやすく説明することば」に焦点を絞って、分析・考察を進めることにした。

(2) まず、日本語教師ではない一般の日本人の講義における語彙の調整行動の実態を探るために、データとしてビジネスマンによる講義2種と専門教員の講義2種を選択した。これらは、すべて留学生対象のオムニバス講義で90分である。4つの講義データに観察された語彙面の調整を以下の4つに分類した。

繰り返し(語・節・文)

・で、その地球環境問題の原因、原因ってわかりますか、原因、原因ってこのわかりますよね。

言い直し(語・節・文)

・その結果として、持続していく、続けていくことができない。

語義説明(一般語・専門語・英語翻訳・日本語翻訳)

・このメモリの間を目測で読みます。目測って分かる? まあ「だいたい」という意味です、だいたい。

その他(NというN、文字)

・で、これ上はあの、全体のごみの日本の全体の量だと思んですけども、下はあの、

会社、企業から出てくる、あの、産業廃棄物っていうごみですね。

(3) 上記のデータで全員が共通して使っていたのは「言い直し」の「語」だけであった。専門教員とビジネスマンの間の目立った差といえば、「語義説明」の「専門語」「英語翻訳」のみであった。この理由としては、前者については、専門的な概念を説明する必要性が専門教員の講義のほうが高いこと、また、後者については、英語での発表や論文執筆の経験があるため、準備しなくてもその場で即興的に出せるということが考えられる。そして、「語義説明」の「専門語」については、特徴的な構造（専門語の導入 明白な提示 解説 再提示）が複数現れた。これは、該当の語を何度も提示することで印象付ける効果、解説の開始部分・終了部分を提示することでまとまりを作り出す効果があると解釈できる。

(4) 先に述べた語彙の調整行動の結果は、講義の送り手（専門教員・ビジネスマン）側から見た「わかりやすさ」、またそれを解釈する研究者側から見た「わかりやすさ」を考える手がかりにはなるだろうと思われる。しかし、最も重要な「講義の受け手」である留学生側から見た「わかりやすさ」を考えるためには、別の視点からの分析が必要であることが、研究の過程でわかってきた。そこで、研究の視点を、講義の受け手側から見た「わかりやすさ」へと移すこととし、実験的な手法で2種類の調査を行った。

(5) 1つ目は語彙の調整行動の中から「専門用語の説明」に焦点を当て、どのような「専門用語の説明」を留学生がわかりやすいと感じるのかを探るものである。まず、機械工学分野の教員による留学生向けオムニバス講義2種（講義A・B）をデータとして、教員が実際に使用している専門用語の説明の表現のバリエーションを調査した。講義から抽出された各表現を、まず情報の提示順によって二分した。具体的には、「専門用語 説明」（X Y）の順なのか、「説明 専門用語」（Y X）の順なのかということである。講義Aにおいて、最もよく用いられている表現は「XというのはY」類<9例>で、「YのことをXと呼びます」類<8例>と「YがXです」類<8例>がそれに続く。情報の提示順としては、全39例中の21例とY Xがわずかに多く、X Yは18例である。講義Bにおいて、最もよく用いられている表現は「XというのはY」類<11例>で、「YのことをXと呼びます」類<7例>が続いている。情報の提示順としてはX Yが全29例中の2/3ほどを占め、残りの1/3がY Xである。講義A・Bとも観察された表現は、「XというのはY」類、「YのことをXと呼びます」類、「YがX」類、「X、Y」類で、特に前

二者は頻出している。

(6) 上記で得られた結果を「専門教員が実行可能なわかりやすい説明の方法」と仮定し、これを参考にして、専門用語の定義の映像・音声4種（「提題型」「質問型」「挿入型」「後置型」）を作成した。これを中国籍の日本語非母語話者（NNS）12名に提示し、それぞれの「わかりやすさ」について5段階で評価をしてもらった後、インタビューを行った。中級前半レベルの日本語力を持つNNSでは、評価結果にバラつきが大きかったが、インタビューで説明の構造に対して複数の言及があったNNSは、提題型・質問型を高く評価していた。一方、上級レベルの日本語力を持つNNSでは、質問型を高く、挿入型を低く評価する傾向があった。この結果をもとに、専門教員が実行可能で、わかりやすい専門用語の定義の方法として、質問型と提題型を提案した。

(7) 2つ目は、語彙の調整行動の中から「一般語の語義説明」に焦点を当て、同様の「わかりやすさ」に関する調査を行った。まず、機械工学分野の教員による留学生向けのオムニバス講義2種をデータとして、「一般語の語義説明」の使用実態を調査した。その結果、大別して以下のような「質問型」「連続型」の表現が見られた。

- ・自動車メーカーなんかで、あのう、衝突試験ってやるじゃない、ね。みんな衝突試験って知ってる？まあ、これ雑談だけど、車をね、ぶつけて、でー、実際壊してみてね、でー、人が死なないかどうか。まあ死なないかどうか、それはあれだけど、あのう、安全かどうかってことを確かめるんだよね。
- ・みんなのいつもの生活で、どんな時に測るってことをしているかっていうと、みんな、体重を量ったりしますよね。自分自身の重さ。ちょっとお正月に食べすぎちゃって、いま太ってるんです、僕。ちょっと70キロを超えちゃって、（中略）やばいかなって状態なんですけど、そういう風に体重を量る。

(8) 上記で得られた結果を「専門教員が実行可能なわかりやすい説明の方法」と仮定し、これを参考にして、一般語の語義説明の映像・音声3種（「質問型A」「質問型B」「連続型」）を作成した。これを中国籍の日本語非母語話者（NNS）12名に提示し、それぞれの「わかりやすさ」について5段階で評価をしてもらった後、インタビューを行った。評価の高かった説明の型は、中級のNNSでは質問型B（質問 要点 具体例）、上級のNNSでは、質問型A（質問 具体例 要点）と質問型Bであった。なお、中級のNNSは、一人を除き、説明の構造の違いには気づいておらず、感覚的に「わかりやすさ」を判断する傾向が強かった。一方、上級のNNSは、全員が

3つの説明の構造の違いを把握した上で、評価をしていた。この結果をもとに、専門教員が実行可能で、わかりやすい専門用語の定義の方法として、質問型Bを提案した。

(9) 2つの実験的調査において、調査後の学生へのインタビューやアンケートの記述などから、特に、中級のNNSの講義理解には、配布資料や教科書など、事前・事後に参照可能な視覚的なリソースが大きな役割を果たしていることが判明した。実際、中級のNNSは、今回の調査でターゲットとなった語彙の説明を聞いても、意味を理解できたものは少なかった。ここから、講義では、第一に視覚的なリソースを十分に与え、発話への工夫はそれを補完するものと位置付けるべきであると結論づけた。

(10) 本研究では、上記で述べた複数の調査の結果により、理工系の専門教員が実行可能な「わかりやすい」日本語での講義の方法の一端を示すことができたと考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

俵山 雄司、講義における専門用語の説明に対する日本語学習者の評価 わかりやすい説明の方法を探るために、専門日本語教育研究、査読有、15号、2013、27-34

〔学会発表〕(計3件)

俵山 雄司、大学講義における「わかりやすい」日本語を考える 留学生の講義理解促進のために、第11回筑波大学応用言語学研究会、2014年9月27日(予定) 筑波大学

俵山 雄司、講義における一般語の語義説明に対する日本語学習者の評価、シンポジウム『評価』を持って街に出よう ひととひとをつなぐための評価研究、2014年2月23日、政策研究大学院大学

俵山 雄司、講義の「わかりやすさ」の要因について 留学生対象の講義をデータとした分析、第5回談話分析コロキウム、2012年12月24日、山形テルサ

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

俵山 雄司 (TAWARAYAMA, Yuji)

群馬大学・国際教育・研究センター・講師

研究者番号：30466685